

高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》

執筆 大村 拓

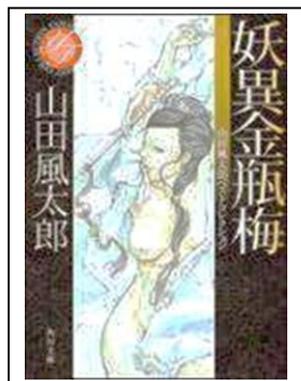
第2回 「横溝正史を継ぐ本格派の巨匠たち」 ～高木彬光と鮎川哲也～

前回解説したように、戦後まもなく横溝正史が次々と本格ミステリの力作を発表していったことから、昭和20年代には「探偵小説ブーム」といった状況が生まれた。こうした状況の中で、横溝正史の影響を受けた本格ミステリの有望な書き手たちが数多く輩出してきた。その代表が今回取り上げる高木彬光と鮎川哲也の二人である。彼らはその個性は違えども、いずれもこの時期にデビューした後、長きにわたりわが国の本格ミステリ界をリードしていくことになる巨匠たちである。

この二人の作品以外にも、この時期の本格物の代表として読んでおくべき作品があるので、その主なものを以下に列挙しておこう。

- 角田喜久雄 ○「高木家の惨劇」(★913ニ3 ◎『日本探偵小説全集3』所収 東京創元社)
坂口安吾 ◎『不連続殺人事件』(★913サ 角川書店)
島田一男 ○「錦絵殺人事件」(★913シ ◎『古墳殺人事件』所収 扶桑社)
山田風太郎 ◎『妖異金瓶梅』(★913ヤ 角川書店)
◎『十三角関係』(★913ヤ 光文社)
加田伶太郎(福永武彦) ◎『加田伶太郎全集』(別題『完全犯罪』) (★913カ 扶桑社)

これらの作家たちは、いずれも本格ミステリ以外のジャンルで認知されている人たちであるが、実は本格ミステリでも優れた作品を残しているのである。ちなみに坂口と福永は純文学者として、角田と山田は伝奇時代小説作家として、そして島田は人気テレビドラマの原作者として有名な人である。



1. 高木彬光（たかぎ あきみつ 1920-1995）



高木のデビューにまつわる経緯は大変ドラマチックなもので、今では伝説と化している。彼は戦前、飛行機メーカーの技術者だったが、敗戦による倒産で職を失ってしまう。そこで易者に占ってもらったところ、「小説家になると成功する」と言われ、それまで一度も小説など書いたことがなかったにもかかわらず、探偵小説作家になることを決意する。横溝正史の◎『本陣殺人事件』（★913ヨ 角川書店）

（高校生のための《本格ミステリ入門（日本編）》第1回 参照）や角田喜久雄の○『高木家の惨劇』（◎「日本探偵小説全集3」所収

★913ニ3 東京創元社）を読んでみて、これくらいのものなら自分でも書けると考えたからだという。そこで1本の長編ミステリを書き上げて、それをいくつかの出版社に送ってみたところまるで取り合ってもらえないのに業を煮やし、当時日本ミステリ界の中心的存在であった江戸川乱歩にいきなり原稿を送りつけたという。ずぶの素人が文壇の重鎮にいきなり原稿を送りつけるとは、あまりにも無謀な振る舞いであるが、これを読んだ乱歩は、その出来に感心し、雑誌掲載の労をとってくれることになり、無事にデビューを果たせたというのである。高木の猪突猛進ぶりもたいしたことながら、乱歩の懐の深さもたいしたものである。以上の経緯からもわかるように、高木という人は、大変な自信家であり、一度決意すると障害をはねのけて一本気に突き進む情熱家である。この性格が、そのまま高木作品の特徴ともなる。あふれんばかりの自信と情熱の下で生み出される作品は、ひとたびツボにはまると大傑作となる。しかし一方、あまり出来の良くない作品では、自信と情熱とが空回りしてより一層駄作に見えてしまうきらいがある。つまり、当たり外れの激しい作家だと言えよう。プロ野球に例えるなら、打率2割のホームラン王といったところか。したがって高木作品の初心者であろう高校生諸君には、必ず定評のある作品から読んでいただきたい。特に以下に挙げる代表作はいずれも場外ホームラン級の大傑作であるので、安心して読んでもらえると思う。

◎『刺青殺人事件』（★913タ 光文社）（1948年＝昭和23年）



【内容】 名人と称される刺青師が3人の子供たちに彫った刺青は、大蛇丸・自雷也・綱手姫というそれぞれ蛇・カエル・ナメクジにちなんだ絵柄であった。しかしこれらは「蛇はカエルを呑み、カエルはナメクジを呑み、ナメクジは蛇を溶かしてしまう」という言い伝えがあるように三すくみの関係になっており、刺青の世界でこの三つを同時に彫ることはタフーとされていたのだ。そしてそのタフーを犯した報いのように、刺青にまつわる連続殺人劇の幕が切って落とされた！

これが伝説のデビュー作である。ずぶの素人の作品ながら、あの乱歩を感心させてしまったのであるから、その出来は折り紙付きである。

「刺青」とは入れ墨のことであり、本作では一貫して入れ墨がテーマとなっている。一般に入れ墨といえば、やくざの世界を連想し、真面目な市民には後ろめたい気分させるものであるが、本作では美女の背中に彫られた華麗な入れ墨が謎の核心となっており、全編にわたって語られる入れ墨に関するうんちくが、一種独特の妖異で隠微な雰囲気醸し出しているのである。高校生諸君にはまず縁の薄いだろう入れ墨の世界をのぞき見ることで、未知の世界を体験してみてもどうだろうか。そしてミステリとしては、完全に密室状態の浴室の中で、美女のバラバラ死体が発見されるのだが、なぜか肝心の入れ墨が彫られた胴体部分だけが、持ち去られているというとびきりの謎が提示されるのである。そしてそのトリックも意外かつ合理的なもので、日本ミステリ史上でも一二を争う出来であるので、大いに期待して読み進めてもらいたい。

さて本作で探偵役を務めるのが、今後高木作品のレギュラー探偵として活躍する^{かみづきょうすけ}神津恭介である。彼は東大で法医学を教える学者探偵であるが、頭脳明晰であるばかりでなく、とびきりの美青年でピアノの腕前はプロ並みと、これほど隙のない名探偵は珍しい。彼にかかればどんな難事件でもたちどころに解かれてしまうのである。そのため、完璧すぎるのが唯一の欠点であるといってもよいだろう。そこでこの近寄りがたいほど完璧すぎる名探偵の個性を中和するために、ワトソン役には、凡庸すぎる松下研三を起用している。大食いかつ大酒飲みでお調子者の松下は、何とも愛すべきキャラクターで、神津の推理には何の役にも立たなくとも、物語としてはなくてはならない存在なのである。

◎『人形はなぜ殺される』(★913タ 角川書店) (1955年=昭和30年)



【内容】日本アマチュア魔術協会の新作発表会で、小道具の人形の首が盗まれた。そして数日後、成城のとある一軒家で発見された首のない死体の横に転がっていたのは、盗まれた人形の首だった。被害者・京野百合子の義理の妹は事件の真相究明を、探偵作家の松下研三とその友人である名探偵・神津恭介に依頼するのだが、再び人形を用いた殺人予告が届くのだった…。

高木が書き下ろした神津ものの傑作長編である。高木は当たり外れの大きい作家であると前述したが、基本的には書き下ろし作に当たりが多く、雑誌連載作に外れが多い傾向がある。本格ミステリとは、じっくり時間をかけて構想を練り、細部にわたり矛盾がないように注意を払いながら書き進めて初めて良い作品となる。それが締め切りに追われてあわてて書かざるをえない雑誌連載では、行き当たりばつりの設定が多くなり、最後に説明しきれない箇所が多々出てきてしまう。これでは本格ミステリとしてはいただけない作品になってしまうのである。しかし本作は神津ものとしてはデビュー作以来の書き下ろし作であるので、高木の緻密な計算が完璧なまでにいきわたり、気迫あふれる力作に仕上がっているのである。

本作はディクソン・カーの影響が色濃く反映された作品である。カーの特徴である怪奇趣味や不可能興味に満ちており、次々と人形が「殺されて」いく事件が起こるのだ。ギロチンで切断された女の首の代わりに切断された人形の首が置かれていたり、鉄路に横たえられた人形を列車にひかせたり。犯人はいったいなぜこのように意味不明の行動をとるのか。極めて意外かつ合理的な説明が最後に示されることになる。特に人形を列車にひき殺させた本当の目的がわかった時に読者が受ける衝撃のすごさは、ミステリを読み続けている者でも十年に一度めぐりあえるかどうかというほどの奇跡の一瞬なのである。

◎『成吉思汗の秘密』(★913タ 角川書店) (1958年=昭和33年)



【内容】兄・頼朝に追われ、あっけなく非業の死を遂げた、源義経。一方、成人し、出世するまでの生い立ちは謎に満ちた大陸の英雄・成吉思汗。病床の神津恭介が、義経=成吉思汗という大胆な仮説を証明するべく、一人二役の大トリックに挑む、歴史推理小説の傑作。

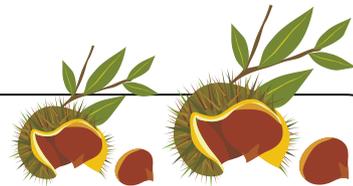
「成吉思汗」はジンギスカンと読む。もちろん羊の焼肉料理のことではない。あのモンゴル帝国の創建者チンギスハンのことであると言えば、真面目に世界史の勉強をしてきた高校生諸君なら知らない人はいないだろう。本作では、奥州平泉で悲運の最期を遂げた源義経が実は生きながらえ、北海道から中国大陸にわたって、ついにはモンゴル族の長となり、史上最大の世界帝国を築き上げたチンギスハンになったことを証明する物語である。

ここで取り上げられる謎は殺人事件のような犯罪に関するものではなく、歴史上の真実に関する

る謎である。しかしこれは歴史学の論文ではないので、あくまでもミステリにおいて名探偵が謎を解くように、証拠に基づいて合理的に推理していくことで歴史の意外な真実を明らかにしていくのである。ちなみにこのようなタイプの作品を、ミステリ界では「**歴史推理（歴史ミステリ）**」と呼ぶ。

本作ではあの名探偵神津恭介が入院中のベッドで、暇にあかせて歴史上の謎を推理していくという形式をとっており、作者はこれを特に「**ベッド・ディテクティブ**」と呼んでいる。これは探偵が現場に行かず、伝聞で得た情報だけで推理する形式を「**アームチェア・ディテクティブ（安楽椅子探偵）**」と呼ぶことに、なぞらえたものである。そしてここで解明されるのは、源義経とチンギスハンが同一人物であったとする説である。これは多くの歴史家が頭から否定しているいわゆる「**トンデモ学説**」であるから、大真面目に受け取る必要はない。しかしこんなとんでもない説であっても、一つひとつ証拠を挙げながら証明されていくのを読んでみると、つつい万が一にも本当であったのではないかとも思えてくるのである。この時に感ずるわくわくするような楽しさは、架空の殺人事件の真相を暴く通常のミステリと共通するものがあり、ここにこそ歴史推理の最大の醍醐味があるのである。

高校生諸君は、ここで証明される説は決してテストの答案に書いてはいけませんが、しかし本作を読むことで歴史に興味をもつ糸口になることは大いにありえる。そのような観点からも社会科の教師である私としては、強くお勧めしたい作品である。

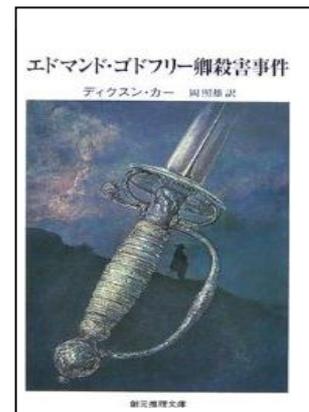


◎ミニ特集 歴史推理の系譜

歴史推理の話をしたので、ここではミニ特集として世界の歴史推理の系譜について、もう少し詳しく解説してみよう。これらを参考にして、さらに歴史に興味をもってもらいたい。

世界初の歴史推理は、あのジョン・ディクソン・カーが書いた◎『**エドマンド・ゴドフリー卿殺害事件**』（★933デ 東京創元社）

であるとされる。これは実際にあった過去の未解決の犯罪事件を推理し、真相を暴こうとする小説である。ここで取り上げられる殺人事件は、イギリスではそれなりに知られた事件であるらしいが、歴史上の出来事としては特に有名なものではない。また推理をするのは、作中の名探偵ではなく作者自身であり、さながらミステリ作家のカーが得意のミステリにおける推理の手法を使って仮説を示した歴史論文といった内容である。またここで示される仮説も合理的で説得力はあるものの、意外性はなく特に面白いものでもない。

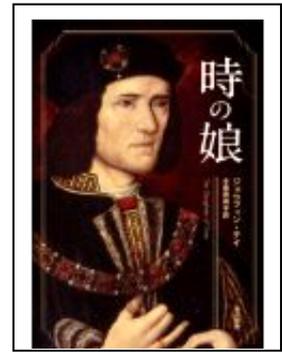


このカーの先行作に影響されて書かれたのがアメリカ作家リリアン・デ・ラ・トアという人が書いた◎『**消えたエリザベス**』である。これもイギリスでは有名な過去の犯罪事件についての推理であるが、1ヶ月間忽然として姿を消した後、突如帰ってきた少女の失踪事件の謎に解決を示している。カーの先行作と大きく違う点は、その真相がミステリ作品のごとくに意外なものである点である。しかし推理するのは作者自身ということに関しては、先行作を踏襲している。

そしてこの2作の影響を受けて、歴史推理の形式を確立させた名作が生まれた。これがイギリス作家ジョセフィン・テイの書いた◎『**時の娘**』（★933テ 早川書房）である。ここで扱う謎は初めて過去の犯罪事件から、歴史上の真実が変わった。本作では悪王として名高いリチャード3世が、実は悪い王ではなかったことを証明する物語である。これにより歴史の定説を覆す真実を証明するのが歴史推理の基本形となったのである。また推理する主体

も、作者自身から作中の名探偵に替わった。ここではテイのシリーズ探偵グラント警部に推理されることにより、ミステリとしての体裁が整ったのである。グラント警部は、長期入院の暇にあかせては、歴史上の推理に没頭することになる。

そしてこのテイの形式をそっくり日本に移植したのが、先述した高木彬光の『成吉思汗の秘密』だったのである。形式こそテイの模倣だが、そのテーマに日本人なら誰でも興味をもたざるをえない義経＝チンギスハン同一人物説を設定したところに、高木の非凡さがあった。そしてこれ以降歴史推理の発展は、歴史好き国民である日本人が担っていくことになるのである。



まず齋藤栄が◎『奥の細道殺人事件』で歴史推理に新趣向を盛り込むことに成功した。それは推理の対象となる謎を歴史上のものだけとせず、それに絡んだ現在の殺人事件の謎までも取り入れたことだ。過去の歴史に関する推理だけでは、どうしても緊張感が希薄となってしまう。そこで推理する主人公側にも何らかの事件に関わらせることで緊張感を高めることができるのである。以後このやり方が、歴史推理のスタンダードとなる。

この後、伊沢元彦と高橋克彦という歴史推理を得意とする作家たちが登場する。伊沢は◎『猿丸幻視行』(★913イ 講談社)でいろは歌に絡む古代史の謎と現在の密室殺人を見事に融合させてみせたし、高橋は◎『写楽殺人事件』◎『北斎殺人事件』◎『広重殺人事件』(3作品とも★913タ 講談社)の浮世絵3部作で、浮世絵師の正体をめぐる興味に主人公の巻き込まれる殺人事件の謎をうまく絡ませることに成功している。

また平成に入ってから、鯨統一郎が◎『邪馬台国はどこですか?』(★913ク 東京創元社)で連作短編歴史推理に新境地を開いた。本来緻密な史料調べを必要とする歴史推理にはある程度の分量が必要とされ、短編はそぐわないと考えられてきた。そこを逆転の発想で、論理の説得性よりも予想外の真相を重視するという切れ味優先の方針をとったことで、短い分量でも書けることを実証した。ここで明かされる邪馬台国の所在地は、歴史家なら絶対に認めるはずもない奇想天外な場所なのだ。

そして現在においても、さすが歴史好き民族の日本人らしく、コンスタントに歴史推理の秀作が生み出され続けている。中でも私の一押しは加治将一である。現代の事件の部分は貧弱だし、主人公のキャラクターも弱いが、歴史の真実の意外性は衝撃的である。特に◎『幕末維新の暗号』(★913カ 祥伝社)は明治天皇の意外な正体を暴いた究極の問題作である。



2. 鮎川哲也（あゆかわ てつや 1919-2002）



横溝正史を継ぐ本格派の牽引者として高木彬光と並び称されるのが鮎川哲也である。しかし鮎川の性格は高木とは対照的である。高木は全身に闘志と自信をみなぎらせて書き上げる文豪タイプだが、鮎川は万事控え目に我が道を行く職人タイプである。売れる売れないに左右されず、ひたすら書きたいものを書く。これが鮎川の姿勢だが、その書きたいものが常にぶれることなく本格ものであったところが最大の特徴である。後世の人が彼のことを「本格派の驍将（※勇ましい推進者といった意味）」と称えるのもこの姿勢による。彼の作風はじっくりと謎解きに専念していく地味

なものだが、トリックや犯人特定のロジックなど本格ものの肝となる部分では一切手抜きがないので、本格もの好きの読者からは、絶大な信頼を勝ち得ている。またいささかピントのずれたとぼけたユーモア感覚も持ち味の一つであり、派手さはない分、一度慣れると何とも心地よく感じられるようになり、未永く読み続けていきたくなくなってしまふのである。

ミステリのタイプとしては、大きく分けるとF.W.クロフツ・タイプのアリバイ崩しものと、エラリー・クイーン・タイプのロジック重視ものに大別される。（《本格ミステリ入門（海外編）》第3、5回 参照）このうち特筆すべきなのは、何と言ってもクイーン・タイプの作品であろう。本格ミステリといえばトリックの考案に尽きるというのが常識であった当時の日本ミステリ界において、クイーンのようなロジック（※犯人特定にいたる論理）の大切さを理解していたことは特筆に値する。現在でこそ本格派の作家の中には、クイーンの影響を受けた人は数多く存在するが、昭和20～30年代頃の日本においては、ほとんど皆無であった。鮎川は時代を30年先取りしていたといってもよいだろう。

それでは以下に、彼の代表作について見ていこう。

◎『黒いトランク』（★913ア 東京創元社）（1956年＝昭和31年）

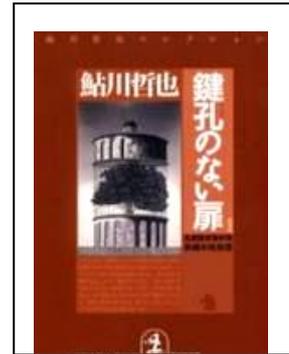
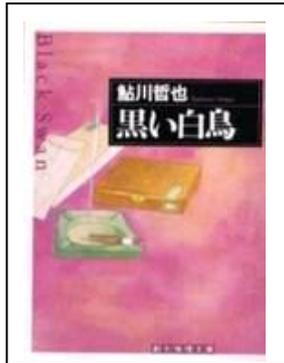


【内容】 東京・汐留駅に届いた大型トランクの中から、男の腐乱死体が転がり落ちた。容疑は当然、九州からトランクを発送した近松千鶴夫にかかったが、彼もまた瀬戸内海上に漂う死体として、岡山県で発見されたのだった。かつて恩いを寄せた人からの依頼で捜査に着手した鬼貫の前に、アリバイの鉄の壁が立ち塞がる…。鮎川の実質上のデビュー作。

本作はクロフツ・タイプの作品の代表作である。クロフツといえば、リアリズム・ミステリを創始し、地道な捜査によるアリバイ崩しを特徴とするイギリス本格派の巨匠であるが、本作はそのクロフツに真っ向から挑んだ力作である。クロフツの処女作兼代表作である『樽』は、英仏海峡を行き来する船荷の樽の中に死体を詰め、複雑に移動させることで作り上げられた犯人の巧妙なアリバイ・トリックを打破していく物語であるが、本作ではその容れ物を樽からトランクに、移動手段も船から鉄道に換えた上で、同様の趣向に挑戦している。しかしだからといってこれを『樽』の単なる模倣と見なしてはいけない。そのトリックの複雑さ、推理の筋道の確実さは本家『樽』をはるかにしのぐ出来である。ここでは読者は時刻表をはじめとする様々なデータを手がかりとして、トランクの移動に関わる複雑なパズルを試行錯誤しながら解きほぐしていく推理体験ができるのである。その知的快感は他では得難いものがある。まさにアリバイ崩しものの最高傑作と評してよいだろう。

そしてここで探偵役を務めるのが鬼貫警部^{おにつら}である。天才的ひらめきではなく、靴底をすり減らしながら地道な捜査を進める努力型探偵であり、当然そのモデルはクロフツのシリーズ探偵であ

るフレンチ警部である。だが鬼貫警部の性格は極めて地味である。わかっているのは「鬼貫」という名字だけで、ファーストネームすら明らかになっていないのである。その意味では組織人としての魅力にあふれるフレンチ警部よりも格段に影が薄い。したがって本作は探偵のキャラクターに惚れ込んで読み進めるタイプのミステリではないと言えるのだが、かといって鬼貫にまるで魅力がないかというところではないから不思議である。地道な捜査のさなか、嬉しそうに好物のココアに舌鼓を打つ姿などはなんとも愛らしく、つきあえばつきあうほど離れがたい魅力が増してくるのである。鬼貫はこの後、ほとんどのクロフツ・タイプの作品に起用されるシリーズ探偵となっていく。もしこのタイプのミステリの魅力を理解していただけたのなら、◎『黒い白鳥』（★913ア 東京創元社）、◎『死のある風景』（★913ア 東京創元社）、◎『鍵孔のない扉』（★913ア 光文社）あたりもあわせて読むと良いだろう。



◎『りら荘事件』（★913ア 東京創元社）（1958年＝昭和33年）

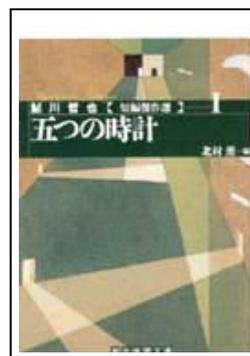


【内容】 残り少ない暑中休暇を過ごすべく、秩父の「りら荘」に集まった日本芸術大学の学生たち。一癖も二癖もある個性派揃いである上に各様の愛憎が渦巻き、どことなく波瀾含みの空気が流れていた。一夜明けて、りら荘を訪れた刑事がある男の死を告げる。屍体の傍らにはスペードのA。対岸の火事と思えたのも束の間、火の粉はりら荘の滞在客に飛び火し、カードの数字が大きくなるにつれ犠牲者は増えていく。進退窮まった当局の要請に応じた星影龍三の幕引きやいかに。

本作はクイーン・タイプの作品の代表作である。これは小説の形式を借りた純然たるパズルであるので、決して小説としての面白さを期待してはならない。山荘に集まった学生たちが次々と殺されていく物語であるが、この手の話にお馴染みのサスペンスやドロドロした愛憎ドラマなどは何もない。まるで記号のように薄っぺらな登場人物たちが一人一人消えていくだけなのである。したがってその物語展開は極めて単調で盛り上がり欠ける。つまりこれだけを見るとまったくつまらない話なのである。しかし本作の主眼はそんなところではなく、物語の中にトリックや犯人を特定するための推理の材料をいかに巧妙に潜ませるかのみに特化して書かれているのである。そしてその手がかりは実は堂々と読者の眼前に示されているにもかかわらず、作者の巧みな誤誘導（ミスディレクション）により普通の読者ならまるで違った意味に受け取らされてしまうことだろう。作者の企みに引っかからないためには、一行一行注意を払いながら手がかりを拾い上げ、論理的推理に基づいて真相を導き出すしかないのだが、多くの読者は作者の企みの前に敗北するしかないだろう。このようにおよそ一部のマニアにしか受けそうにないような作品を、手間暇かけて作り上げる鮎川という作家はなんとも奇特な人で、当時の日本では希有の存在であったのだ。

なお本作で探偵役を務める星影龍三は、クイーン・タイプの作品限定で起用される名探偵であるが、彼の人物造形も他の登場人物と同様、実に薄っぺらで、さしたる魅力もないのが残念なところである。

もしこの手のタイプの面白さが理解できたなら、純然たる犯人当て短編である○「達也が嗤う」（◎『下りはつかり』所収 ★913ア 東京創元社）や○「薔薇荘殺人事件」（◎『五つの時計』所収 ★913ア 東京創元社）もお勧めしたい。これらは当時のミステリ作家仲間たちの会合で朗読するために書かれた作品なのだか、プロの作家たちを相手にしていかに真犯人を当てさせないようにするのか、技巧の限りが尽くされている。



私の一押し!!

例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

鮎川哲也

○「クイーンの色紙」（◎『クイーンの色紙』所収 ★913ヨ 東京創元社）

（1987年＝昭和62年）



【内容】 推理作家の色紙を集めるのが趣味の翻訳家が自宅でパーティーを開いたところ、最も自慢としていたエラリー・クイーンの色紙が消えてしまうという事件が発生。常識的に考えれば出席者の誰かが色紙を盗んだと考えたが、誰にも色紙を持ち出す機会がなかった。色紙はどこに消えてしまったのか。事件の話の聞いただけで「三番館のバーテンダー」が人間の盲点をついた真相を解き明かす。

本編は鮎川が創造した鬼貫、星影に次ぐ3人目の名探偵「三番館のバーテンダー」が活躍する一短編である。「三番館のバーテンダー」とは氏名不詳の一介のバーテンダーに過ぎないが、彼は実は大変な名探偵なのである。事件捜査に行き詰った私立探偵「わたし」が、バー「三番館」を訪ね、カクテルを飲みながら事件の概要を語り始めると、黙って話を聞いていただけのバーテンダーが、予想外の視点から名推理を披露し、真相を言い当てるといのがお決まりの展開で、いわゆる安楽椅子探偵（アームチェア・ディテクティブ）ものの典型である。

さて本編の最大の特徴は、そのトリックに作者の人柄が強く反映している点にある。私は一度晩年の著者にお会いしたことがあるが、その人柄は評判どおり、謙虚で温厚なものであった。そして本編のトリックは、まさにそういった性格の人でしか生み出せないものなのだ。クイーンの色紙はどこに消えたのか。この謎が解き明かされた時、著者の謙虚な人柄が読者の胸を打つことであろう。書き手の人柄を反映したストーリーや人物描写なら前例はいくらでもあろうが、人柄が反映したトリックなど、そうそうお目に書かれるものではない。

社会派全盛時代の二人

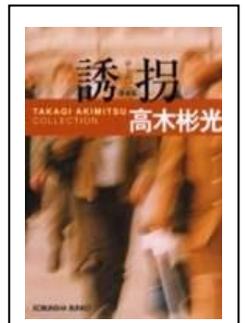
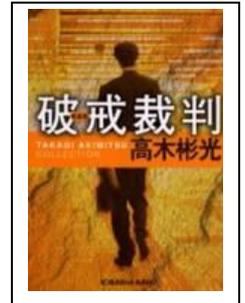
それでは最後に、高木彬光、鮎川哲也の両名が社会派全盛時代をどのように乗り切ったかを解説しておきたい。横溝正史の回でも述べたように、昭和30年代のわが国のミステリ界は社会派

全盛時代に突入する。（その詳しい解説は次回、本シリーズ第3回で行う予定。）これは現実根ざしたリアルな小説のみが価値あるものと見なされ、逆に非現実的な殺人事件や名探偵の活躍を扱ったような本格ミステリは、幼稚で価値の低いものと見なされてしまった時代のことである。高木の神津恭介ものや鮎川の星影龍三ものなどはその典型で、批判の矢面に立たされることとなった。こんな時流の中、横溝は一時筆を折ってしまったわけだが、高木・鮎川は、まだデビューしていくらもたっていない現役バリバリの作家で、なんとしてもここで消えてしまうわけにはいかなかった。そこで彼らはそれぞれのやり方でこの苦難の時代を乗り切っていくのである。

高木はこの時期作風を一新して社会派風の作品を書くようになる。時代に合わない神津ものを書くのはやめ、弁護士や検事を探偵役とする社会派タッチの作品にシフトしたのだ。しかし何事にもエネルギーに全力投球で臨む高木らしく、このジャンルでも大きな成果を挙げてしまうのだ。たとえばこのタイプの代表作である◎『**白昼の死角**』（★913タ 祥伝社）は、現実にあった手形詐欺事件を題材としたもので、膨大な資料を読み込んで書き上げた社会派ミステリの力作である。さらに◎『**破戒裁判**』（★913タ 光文社）と◎『**誘拐**』（★913タ 光文社）では社会派と本格派の融合に成功する。

『破戒裁判』は部落差別を題材とし、『誘拐』は現実起こった幼児誘拐事件を題材としている点で、十分に社会的メッセージをもっているのだが、同時に読者をミスリードし真相の意外性を演出するという本格ミステリ固有の遊び心も有しているのだ。これらはある意味著者の最高傑作であると言ってもよいだろう。

一方、鮎川の方はどうだったのか。彼の星影ものに代表されるクイーン・タイプの作品は、当時本格派が批判される時の決まり文句「人間が描けていない」がそのままあてはまってしまうような作品であったため、しばらくこのタイプのものは書けなくなってしまう。しかし鮎川にはもう一つ鬼貫ものがあつた。こちらはリアリズムを標榜するクロフツ・タイプのミステリなので、社会派との相性は良かったのだ。そこでこの時期の鮎川はもっぱら鬼貫ものの執筆に専念していくことになる。実のところ鮎川の鬼貫ものは謎解き以外には関心をもたない本格ミステリ以外の何物でもないのだが、リアリズムの衣をまとっていたために、批判の目から逃れることができたのだ。さらに元来売れる売れないよりも、自分が書きたいものを書くという職人氣質の作家であったため、およそ流行とは程遠いこれらの作品を書き続けることができたとも言えよう。



【注】 1.◎『 』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「 」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。

2013.10.3 更新